名湯・秘湯で湯浴みする（その二二）

［四七］　鞍馬の火祭と時代祭（番外ツアー）
（二〇一一年）【再筆】

一〇／二一（金）　本厚木　五五六
小田原　六三三
七〇八こだま六三一
名古屋　九一六
長谷寺　一〇五〇
奈良公園一四〇〇
嵐　山　一七三〇サンメンバーズ
京都嵯峨（泊）
〇七五-八八二-八七七一
一〇／二二（土）　嵐　山　九三〇
嵯峨野
下鴨神社一一二〇
延暦寺　一三三〇
京都市内一六三〇
鞍馬火祭一八三〇
奥琵琶湖二一五〇
マキノプリンスH（泊）
〇七四〇-二八-一一一一
一〇／二三（日）奥琵琶湖　九〇〇
京都市内
時代祭　一一三〇～一四三〇
名古屋　一七五〇
一九二八こだま六八〇
小田原　二一三八

折　挟　Y

大体において私は祭なるものにはほとんど興味も関心もないのだが、対照的にカミさんは大の祭好きで、関心も深い。今回のツアーが「時代祭」と「鞍馬の火祭」を目玉にした夫婦限定の旅だということを目にしてカミさんは一も二もなく参加を決めた。私は時代祭がいかなる祭であるか、火祭がどのように行われるのか、まったく何の知識もなく関心もないので、個人的には旅行の参加はまったくそぐわないのだが、夫婦限定であるということから私が不参加を言い立てればカミさんが時代祭も火祭も見物できないことは火を見るより明らかだった。

そういうわけで私は連れられて旅に出る羽目になった。ただ、私は旅が好きだから旅に出ること自体は何

の違和感もなく、いつもの旅行と同じように出かけることになった。ツアーの細目は旅の一週間ぐらい前にならないと分からないので、集合に関しては少なからず心配していたのだが、案の定、新横浜六五二、集合六三五は前日から動き出さないと対応できないと判明した。小田原からの乗車が可能だというのでそちらを選択したのだが、小田原七〇八発のこだま六三一に乗るのもそう容易ではない。カミさんは普段から足腰が不自由で、膝に痛みも抱えている。いざという段になっても「ちょっと走って」というわけには行かない。一番のバスが五四四、本厚木駅まで普通一〇分はかかるから五五四着と見込まれる。小田原行きの電車は本厚木を五五六に出るから、二分の間にバスから電車へ乗り継がなければならない勘定なのだ。机上の計算では間に合うはずがないのだが、早朝だという利点があり、道路が空いていればバスの時間がかなり短縮される可能性もある。ダメで元々という気分でバス停に急ぐ。バスは時間どおりに来て、途中快調に走り、本厚木駅に五五二に到着した。お陰で慌てることなく五五六の小田原行き急行に乗ることができたのだった。

小田原でこだま六三一に乗るとすぐ、用意のにぎりめしを食べる。この日は文字どおり四時起きでおにぎりづくりに取りかかった。炊飯器は前日セットしておいたから時間どおり飯が炊けている。梅干し・鮭・鰹節の三種、二人前を二食分握ったのだが、案外時間がかかって驚いた。しかし、やはり手作りのにぎりめしは旨い。カミさんもことのほか喜んで食べる。名古屋には定時に到着し、すぐ観光バスに乗り込んだ。初日は前から四番目という願ってもない座席が指定された。あの辺りの道路はあまり詳しくないが、ガイドさんの説明を地図に照らすと、東名阪自動車道路を亀山まで行き、二五号線の名阪国道と三六九号線を経由して一六五号線で長谷寺までというコースを辿ったようだった。道路は途中混み合うこともなく目的地に着いた。途中の景観では木曽川と長良川・揖斐川の河口近くの雄大さが印象的だった。この景色は四日市方面へ行く電車からも見ることができるので、これまでにも二、三度目にしたことがあるのだ。

長谷寺は真言宗豊山派総本山のお寺でかつて一度訪れたことがあるのだが、まるで記憶にない。仁王門も登廊も本堂の一一面観音も何も覚えていない。長谷寺の売りは牡丹を筆頭に四季の花と本尊の一一面観音だという。訪れたのが一日遅かったら、一二メートルを超す日本最大の一一面観音の特別拝観ができた由。一

○月二二日から一二月一一日まで行われるこの拝観では観音像の足元まで近づくことができるそうである。一一面観音については比較的最近、井上靖の『星と祭』という小説を読んで、主人公が愛娘を琵琶湖に亡くして、その鎮魂のために琵琶湖周辺の寺寺に一一面観音を訪ねて廻る話が綴られていて記憶に焼き付いている。本堂の脇で偶然出会った若い僧侶に『星と祭』を読んだことがあるかと聞いて、ない、というから、是非一度読むといい、と言って本堂を辞した。

　長谷寺から天理市を通って奈良公園へ行く。東大寺の大仏殿は久しぶりに訪れたが、その大きさに圧倒される。大仏像もいいが、大仏殿を囲む庭園も見事だ。特別のこしらえのないのがいい。奈良公園から宇治・伏見を経由して京都に入り、宿に指定されたサンメンバーズ京都嵯峨に到着した。道路に面していて情緒はないが、いわゆるシティホテルとしては上等の部類に入るホテルである。部屋は清潔でゆったり広い。温泉ではないからそのほうの楽しみはないが食事処で供せられる夕食はそれなりに期待が持たれた。

◆神無月お品書き
　～京都時代祭と鞍馬の火祭～

おまわり
　菊花と京水菜の浸し
　厚焼きと車海老の艶煮
　東寺巻き　八幡巻き　柿餅
椀替わり
　土瓶蒸し
造里
　鱧　松茸　京三つ葉　スダチ
　鯛　甘エビ　あおり烏賊
　　あしらい　柑橘醤油
旬の八寸
　無花果と京芋揚げ出し
　伏見唐辛子
　ぐじ西京焼き　栗
　花茗荷　紅葉麩
箸休め
　羽二重蒸し　紀州南高梅
主菜
　黒毛和牛ステーキ
　　季節の野菜を添えて
食事
　京都越畑の棚田米
　　香の物　赤だし
甘味
　季節の水菓子盛り合わせ
　　神無月　吉日
　日本料理　嵯峨　料理長　柳　博志

このように書き出したものを見れば大層な料理だと手を打つだろう。確かにお品書きどおりの料理が運ば

れてきたのだが、それにしても量が少ない。ダイエットを心がけている人ならちょうどいいかもしれないが、刺身はそれぞれ二切れ宛て、ステーキは五〇㌘ほどという具合で、出されれば一箸か二箸でなくなってしまう。せめてご飯ぐらいはお代わり自由方式を採用すればいいと思うのだが、その気配はなく、全部食べ終わった頃に申し訳程度に「お代わりはいかがですか」と声がかかったが、とても食べられたものではない。京料理は上品だというけれど、これは上品とはほど遠いケチの範疇だというべきだと思った。

二日目はこの旅の最大の眼目とされた時代祭の当日だったが、天候不順ということで、朝六時の時点で早々と中止、翌日に延期が決まったために、旅行の行程が三日目と入れ替えになり、比叡山延暦寺を訪れた。延暦寺へ行くのは初めてだったからそれなりに興味はあった。緩やかな参道の両側に延暦寺で修業を積んだ開宗祖の名前が時代順に紹介されていて興味を引いた。延暦寺と言えば傳教法師の最澄上人が建立した天台宗の総本山ということしか頭になかったが、最澄と並び称される弘法大師の空海上人もここで修業を積んだことを知り面白かった。板書を見ると、浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞、時宗の一遍などの上人の名も見える。曹洞宗の道元上人や臨済宗の栄西上人もここで研鑽を積んだのだったかもしれない。宗派に関わらない仏教界全体の研修道場という位置づけだったとすると、おそらく高野山金剛峯寺も同じような修行場であろうと想像は広がる。その意味ではまだ訪れたことのない高野山へも足を運ぶ必要があるのかもしれないと思う。

延暦寺を降りて京都市内に戻り、早めの夕飯を振る舞われて、ジャンボタクシーに分乗して鞍馬へ向かった。この間どんよりとしてはいたが、ほとんど雨らしい雨は降らなかったから、時代祭は予定どおりできたはずだという怨嗟の声が旅行者の口の端に登るのも無理のないところだったが、皮肉なことに、鞍馬の火祭に出ようとする辺りから雨が落ちてきて、タクシー終点の貴船口に着く頃はかなり本格的な雨になった。

叡山電車鞍馬線の貴船口駅から終点の鞍馬駅まで鞍馬川に沿って一・五キロほど歩くのである。歩くと何が出てくるのか、ほとんど添乗員の事前の説明のないまま、雨の中を歩き始めた。カミさんはただでも歩くのに時間がかかり難渋することが多い上、暗闇の夜道のだらだらした上り坂とくるとほとんど足は竦んで前へ進まない。一五分ほど歩いた頃、前方に薪の燃えているのが見えた。高さ五〇センチほどの金属製の籠の

中で火が燃えている。火祭の主役を務める松明に点火するための火ということだった。この辺りから人出は多くなり、細い街道がごった返すようになった。道の中央は松明の通り道で、両側を上下する人々が歩くのだが、徐々に増えた人波のためにほとんど列は前へ進まない。諦めて帰ろうにも人の波が邪魔になって戻るのも容易ではなさそうだった。このままでは二進も三進もいかない状況となったので、警護の人に「鞍馬の駅までどのくらいありますか」と聞く。「三〇〇メートルほどでしょう。郵便局がありますから左に折れてください」と言うのを聞いて、とにかく駅まで急ごうと思った。そこで、まだ松明の歩いてこない道の中央に出て、人波を避け、急ぎ足で雨中の行軍を敢行した。警護の人の中には、駅へ急ぐのだから、と言うと進んで道を空けてくれる人もいたが、中には、皆並んでいるのだから、ロープの中へ入って列について歩け、と言って手で押しとどめようとする者もいる。あれこれの抵抗はあったけれど、何とか鞍馬の駅にたどり着くことができて愁眉を開く思いだった。貴船口から歩き始めて四〇分ほどで一駅歩いたことになる。急ぐ途中で、大小の松明が上のほうから担がれて通りかかるのを見て、これが鞍馬の火祭というものかと改めて認識したりした。

鞍馬から一駅を電車に乗って戻ると、貴船口の集合場所にはまだ連れの旅行者はほとんど戻ってきていない状況で、とにかく皆に遅れないで集合場所に来られたことでホッとするのだったが、雨のためか、ひどく寒い思いをしたものだった。この後奥琵琶湖のこの日の宿を目指してバスで移動したのだが、宿到着は二二時近くとなり、いわゆるシティホテルの施設のため宿で飲食物を入手できないことから、宿入りの直前終夜営業のコンビニ店へ立ち寄ったのは皮肉の限りだった。私たちは翌日のことも考えて、何の飲食物も補強することなく、宿に着くとすぐに就寝することにした。

三日目は延期された時代祭の日だった。心配された天候も何とか回復して祭は予定どおり行われた。京都御所の端から平安神宮にかけて行列が進む。一二時から一四時までの予定である。行列は明治維新の頃から始まり、平安時代に向かって時代を遡る仕掛けである。江戸時代、戦国時代、室町時代、鎌倉時代と戻り、延暦時代で終わるのだが、室町時代と鎌倉時代の間に吉野時代などという区切りを入れて、天皇制の変遷を意識した特異な時代認識を強要している。その時代その時代の衣装などに工夫を凝らしているように思われる

が、総体的に平板で立体感に欠けている。たくさんの馬が登場するのだが、中には馬の扱いに不慣れな馬子もいて行列の円滑な進行を妨げている。元々こうした祭には興味も関心もない身としてはすぐに見飽きて、早く解放されたいものだと思うばかりだった。

途中抜け出して自前で錦市場でもぶらついたほうが余程精神衛生上いいと思ったものだが、カミさんは時代祭などというものにことのほか興味を持つほうだから、錦市場ぐらいでは中座するだけの弾みにはならないのは明らかで、抜けようというわけにはいかないのだった。

一四時半にバスが出発して一路名古屋へ向かう。雨で日程が狂ったために、近江八幡などの散策も割愛されてただ帰途に着くばかりとなった。名古屋駅で時間が十分あったものだから、新幹線の車内で摂る夕食のための食材を求めて駅ビル内外を物色した。高島屋デパートなど一流の店が出ているにも拘わらず、こちらが求める焼酎の小瓶などの品揃えがない上、近くのコンビニでも飲料用の氷が手に入らなくて往生した。その点、大阪や京都ではこうした品物を揃えている店が駅の近くにあって助かっている。

今回の旅は雨のため日程どおりに行かなくて不備がそこここに目立つ旅となった。雨で日程が左右されること自体、あることなのだから、その辺りを考慮した組み立てが必要だと思う。二日目の奥琵琶湖泊が問題を大きくしたのではないか。確かに目覚めた朝の竹生島の景観は素晴らしかったが、一時間半以上の時間をかけて泊まるほどの意味はないと思われる。京都市内に宿を取っていれば、夜九時前には宿に着くはずだし、コンビニでおでんを買い込むような仕儀に至らなくても対処する方法はあったはずだからである。

長谷寺回廊

奈良公園

[四八] 四日間一五〇〇〇円の旅で山形・秋田・岩手の秘湯を廻る(二〇一二年)【再筆】

一／一四(土)　本厚木　八一四さがみ七〇
　　新宿　九〇〇
　　九一〇
　　東京　九二三
　　九五六はやて二一
　　新青森　一三一九
　　一三四二つがる六
　　碇ヶ関　一四三〇日景温泉(泊)
　　〇一八六-五一-二〇一一
一／一五(日)　碇ヶ関　一〇三五つがる一
　　新青森　一一二〇
　　一一四二はやて二四
　　盛岡　一二三五
　　一四一〇やまびこ六〇※
　　新花巻　一四二二バス
　　一五〇〇鉛温泉・藤三旅館
　　(泊)〇一九八-二五-二三一一
一／一六(月)　新花巻　一一二二やまびこ五四
　　古川　一二〇六
　　一二一二
　　赤倉温泉一三二一三之亟(泊)
　　〇二三三-四五-二三〇一
一／一七(火)　赤倉温泉一〇二五
　　新庄　一一〇八
　　一三一七つばさ一四四
　　東京　一六五六

大人の休日倶楽部会員のための特別パスが一月・六月・九月の年三回発行される慣わしとなっている。年によってその内容に少しずつ変化がつくのだが、今回は四日間一五〇〇〇円パスで東日本のエリアと一部関西エリアの金沢福井までの範囲となった。昨年は三日間一二〇〇〇円のパスで日本海沿岸の山形・三瀬と新潟・田ノ浦を訪れたのだが、今年は四日間となったので、秋田の日景温泉・岩手花巻南の鉛温泉・山形の赤倉温泉を廻ることにした。いずれも日本秘湯の会員宿でスタンプ集めも考慮のうちである。

昨年の田ノ浦温泉行きでは日本海特有の強風のために羽越本線の電車が運休してやや難渋した記憶がある。今年はどうかとやや案じながら旅に出たのだが、案の定、新青森からの奥羽本線の電車が大雪のため運休し

ているという事態だった。駅のアナウンスでは弘前まで代行バスが出ると報じている。日景温泉は弘前から電車で二〇分はかかる。状況を説明するために日景温泉の宿に電話を入れると、「弘前まで来れば後は大館まで電車の便がある」ということだったので、代行バスで弘前を目指すことにした。

今年は年明けから何とはない違和感がついて回るようで、漠然とした不安があって、何もなければいいと思いながら旅に出たのだが、旅も終わりに近づいた最終日に予期しないハプニングに見舞われることとなった。赤倉温泉の宿を出る前に確かめようとした大人の休日倶楽部会員パスの二枚の内の一枚がどうしても見当たらないのだ。切符の紛失は何としても防がなければ旅にならないわけで、これまでもパスの管理には念には念を入れて気遣ってきたのだが、とうとう紛失という事態を招いてしまった。

宿から新庄駅へ一報を入れると、とりあえず駅の事務所へ来てください、対処方についてご相談しましょう、という係員の応対だったから、なにがしかの希望もあるのかと思いながら新庄まで行く。待ち構えていた駅員によって緑の窓口へ案内されると、陸羽西線の赤倉から東北新幹線東京まで乗車券と特急券を購入しろというばかりなのだ。「対処方について相談」ということだったが、と一言入れても、切符をなくしたのはお客さんの責任で、ＪＲ東日本としては考慮のしようはないというにべもない返答。二、三合やりあってはみたものの「乗るには切符を買っていただく決まりですから」と言われてしまうと、どうにも争う余地はないのだった。「お客さんが切符を買ったことは分かりますが、落としたということになると、誰かに拾われて使われたりしたらどう責任を取るのですか」などと言う。

切符の紛失という言い訳の出来ない自分の失態が招いたこととはいえ、この際の九〇〇〇円なにがしかの出費は相当な打撃だった。普段は何かにつけて口うるさいカミさんが何も非難めいたことを言わないのが唯一の救いとなった。

因みに、年明けからの違和感はその後も次々に形を変えて出現した。まず、旅から帰った翌日のことである。柳家小まん師匠の落語会の今年一回目の公演を聞きに出向いたときのことだ。小まんの会は今から一六年ほど前に始められたもので、私はほとんどそのはじめから年間券会員になっていて、年六回奇数月に開か

れる落語会を聞きに行く。落語会は横浜馬車道の横浜市民会館小ホールを会場として行われるので、横浜へ出て根岸線で桜木町か関内まで行く。このときは少しゆとりを持って出かけたので、横浜駅で高島屋に立ち寄って、孫の佳奈の好物である生八つ橋を買い求めようとしたのだが、いつも入っているはずのズボンのポケットに財布がない。しまった！　落としたか、と思いながら、念のために何度も確かめたのだが、ついに見つからない。生八つ橋はカードで買った後、家へ電話を入れた。「ボクの財布があるかどうか、机の引き出しを見てくれないか」と聞く。ややあって、「あったわよ」とのカミさんの声が聞こえてきた。

財布がなくなっていないことが分かってほっとしたのだが、この日は小まんの会の年間券を購入しなければならなかったので、関内駅から労働金庫横浜支店を回って預金口座からなにがしかを引き出して支払いに充てた次第。一瞬ひやりとした話だった。

落ち着かない思いの二つ目を一八日に続く二〇日にまた味わうこととなった。この日は金曜会で神奈川県庁の少し先にある県自治会館へ行った。金曜会というのは退職校長の中の有志で作っている囲碁の同好会。会員は一二名ほどいるが、いつも出てくる会員は八、九名で一〇名集まることは滅多にない。自治会館の会議室を借りて月一回金曜日に会を持つことにしているが、二〇日は雨降りとなったので自治会館の玄関を入った後、傘をホルダーに納めてキーを手にした途端、手が滑ってキーを落としてしまったのだ。一人でしばらく辺りを探したのだが見つからない。フロントに声をかけて一緒に探してもらったのだが、どうしても見つからない。フロントの係員は「このホルダーはマスターキーがありませんので、業者を呼んで鍵を外すほかありません。今すぐというわけにはいきませんので今日はこのままにしておいてください」と言いながら、くだんの傘を揺するとホルダーが外れて傘を取り出すことが出来たのだが、紛失したキーのほうは結局見つからずじまいのままとなった。その後キーが出てきたかどうか、確かめないままになっている。

違和感というか行き違いというか、いずれにしてもこの春のそうしたハプニングの中で最大のものは、打っていたパソコンから文書が丸ごと失われてしまったことである。この名湯秘湯シリーズも原稿が大分貯まるものだから、一定の量でフォルダを新設することにしている。(三)と(四)が一部ダブって保存されていたので、(四)のうちの（三）を消して、(三)と(四)を分

けることにした。こうして出来た新しい（三）と新しい（四）をそれぞれ保存しようとしたとき、（三）についての作業中画面が突然暗転した。こちらが指示したわけではなく、パソコンが勝手に「すべて選択」状態にしたわけである。この暗転した画面に対して、暗転状態を解除するために欄外でクリックしたところ、（三）の文書全体が突如として消えてしまったのだ。処理を間違えなければ、どこかに保存されていたのかもしれないが、パソコンのトラブルに対してはほとんど素人だから、結局失われた文書は二度と回復しない事態となった。かくて、「四二」から「四六」までの名湯秘湯はもう一度打ち直さなければならないこととなった。戻しキーを使えば簡単に修復したはずだと後々になって気づいたのだが、そこに気づかなかったためにまったくの手遅れとなってしまった。

新青森から代行バスで弘前まで行き、弘前から碇ヶ関行きの列車が出て碇ヶ関へ着くことが出来た。当初案から二時間余り遅れた格好だが、ここからは宿の送迎車のお世話になった。とにもかくにも宿入りが出来てまずはめでたしめでたしというところ。日景温泉の湯は宿の自慢で、どちらかというと微温湯。夜は電灯が薄暗いので、ちょっと頼りないが、朝は日の光が入って明るい。食事は典型的な山家料理。秋田県だけあってきりたんぽがご馳走だ。焼酎はなく、日本酒でがまんするほかないのだった。

二日目は雪も平時に戻って鉄道が復旧しており、予定どおり新青森から新幹線で盛岡まで行き、乗り換えて新花巻まで行った。ここからは花巻南温泉郷のシャトルバスが出ているが、この日は大勢の客が乗り込んで補助席まで満杯となった。鉛温泉の藤三旅館はかつて秘湯の会の会員宿だったが、今度行ってみると、会員ではなくなっていてスタンプのサービスを受けることが出来なかった。ここには何回か来ているのだが、日帰り湯利用だったり、自炊部宿泊だったりして、これまで一度もスタンプを受けることのない宿だった。今回こそと期待して旅館部宿泊としたのだが、会員から外れたためスタンプを受ける機会は全くないこととなったわけである。

白猿の湯という立ち湯が有名で、ほかの源泉もなかなかの温泉であるが、スタンプの魅力がないということになると、今後、温泉だけのためにわざわざ来ることもないように思われるのである。

三日目は古川から陸羽東線利用で赤倉温泉へ行った。

ここは今回が初めてだったが、温泉は岩風呂も露天風呂も素晴らしい。つるつる、すべすべの「琢秀度」は五ないし六というところだろう。ただ部屋の寒いのに閉口したから、この次は寒くないときに来るのがいいと思った。食事は山家料理で、豊かに供されるイモが美味である。焼酎も飲めるが、美味い焼酎というわけにはいかない。

今回の旅行で秘湯の宿のスタンプが二つ貯まり、スタンプ帳が一杯になった。七回目となる勘定だが、スタンプ一〇個の無料招待権をどこで使うか、ちょっとわくわくする思いがしている。

赤倉温泉三之亟